

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	源河 亨
主 論 文 題 名 :				
知覚と判断の境界——知覚はどれだけのものを捉えられるか——				
(内容の要旨)				
<p>本稿の目的は、一見すると知覚可能ではないと考えられるようないくつかの性質・事態が、実のところ知覚可能であると主張することである。</p> <p>何かを知覚したとき、われわれはさまざまな物事に気づく。たとえば、白いマグカップを見ている場合、これは白い、円筒形をしている、固そうだ、これはマグカップである、取手を掴める、なかに何も入っていない、見栄えがいい、等々に気づくだろう。では、そうしたさまざまな物事のうちのどこまでが知覚されたもので、どこからが判断されたものなのだろうか。</p> <p>色・形・大きさ・音など、知覚可能性が問題なく認められるものは低次性質と呼ばれる。他方で、〈マグカップである〉などの種性質、〈何も入っていない〉といった不在・欠如、〈壊れそう〉などの傾向性、〈怒っている〉といった他者の感情、〈優美である〉といった美的性質、〈上に座れる〉といった行為可能性など、一見したところ文字通り「見える」ものではなく、見た結果として「わかる」、「判断されている」と思われる性質は高次性質と呼ばれる。別の言い方をすれば、高次性質は、低次性質と同じように知覚されていると主張すると異論が出てきそうなのである。それらは、低次性質の知覚に推論が加わって判断されるものだと考えられるかもしれない。</p> <p>本稿は、高次性質のなかでも、種性質、他者の感情、不在、美的性質を検討し、最後の二つについては積極的に知覚可能性を擁護する。そのために「高次モード知覚説」を提示する。</p>				
【高次モード知覚説】				
<p>高次モード知覚説は、意識的な知覚経験に反映されるものを「知覚されているもの」と「知覚のされ方（モード）」の二つに分け、低次性質は知覚されているものとして意識に現れるが、高次性質は、知覚されている低次性質の知覚のされ方として意識に現れると主張する。そして、高次モード知覚説が導入する知覚のモードは、「ゲシュタルト的まとまり」である。つまり、色や形といったものの集まりがゲシュタルト的にまとまるという仕方で知覚されることによって、高次性質が知覚的意識に現れると主張するのである。本稿では、この知覚理論がさまざまな高次性質の知覚可能性を主張する基本的な枠組になると主張する。</p>				

【第1章】

第1章の目的は、知覚可能性に関わる様々な見解をサーベイし、それを踏まえて、知覚可能性を問うことにどのような意義があるのか、そして、高次性質の知覚可能性を主張する理論が果たすべき課題は何か、を特定することである。後者は最終章の検討事項となる。

初期分析哲学の代表的な知覚理論であるセンスデータ説は、確実な知識の基礎を求め、不可謬・不可疑な知覚対象として措定されたセンスデータが例化している低次性質のみが知覚可能であると主張する。それに対して現象学的見解は、われわれの経験の一人称的な観点からの記述を重視し、高次性質は知覚可能性だと主張する。他方で、知覚の神経相関項を探求する経験科学的な方針では、高次性質が知覚可能かどうかについて決着が出そうにない。というのも、高次性質に関わる神経相関項が知覚システムに属すかどうかを決めるためには、あらかじめどこまでが知覚可能であるかが理論的に定まっていなければならないからである。

こうした意見の相違を見ると、高次性質は知覚可能かという問いは、何を「知覚」と呼ぶかという関心相対的なものであり、そうした関心を離れて事の真相などないように思われるかもしれない。さらに、高次性質の知覚可能性を問うこと自体にも大した意義はないと思われるかもしれない。というのも、高次性質が知覚可能であろうとなかろうと、何かを知覚したときにその対象がもつ高次性質についての判断を下せることは確かだからである。その判断が形成されるまでの過程に推論や解釈が介在しているかどうかはあまり重要ではないのではないか。結局のところ、知覚と判断のあいだがどうなっているかはブラックボックスでも構わないのではないだろうか。

だが、高次性質が知覚可能であるということからは、知覚不可能であると考えた場合には導けない実質的な帰結が導かれる。それを理解するうえで重要なのは、知覚は、環境にどのようなものがあるのかという**存在論**と、われわれはどのようにしてそれを知るのかという**認識論**を橋渡しする特別な心的状態だと考えられていることである。知覚対象は知覚されうるものとして客観的な環境に属しており、また、知覚は対象についての信念・判断の根拠を与えるものだと考えられている。そのため、もし高次性質を捉える心的状態が知覚であるなら、高次性質も客観的なものとして環境に属しているということになり、また、高次性質についての信念・判断は高次性質の知覚によって非推論的に正当化されているということになるだろう。高次性質が知覚可能であるなら、こうした興味深い存在論的・認識論的帰結が導かれるのだ。

問題の意義をこのように特徴づけると、**高次性質の知覚可能性を主張する理論は、そこから存在論的・認識論的帰結を引き出せるものでなければならない**ということになるだろう。この点は最終章の検討事項となる。

【第2章】

第2章では、高次性質の知覚可能性が注目を集めるきっかけとなった Siegel (2006)と、それに対する反論をサーベイする。それらで検討されている高次性質は種性質だが、本稿は種性質の知覚可能性を積極的に擁護するわけではない。むしろ目的は、既存の議論のどこに問題があるかを明確にし、それに基づいて、より一般的に、さまざまな高次性質の知覚可能性を擁護するうえで必要な方針がどのようなものかを見定めることである。

Siegel の議論には「現象的対比」が用いられている。たとえば、松を他の木から区別できなかった頃と松を区別する能力を身につけた後とでは、松を知覚したときの知覚経験の現象的性格（本人にとって経験がどのようなものであるか）が異なっているだろう。Siegel はこうした違いを、松を区別できる場合には松性が知覚されており、それが現象的性格に影響を与えたと説明する。このように、現象的性格の違いから高次性質の知覚可能性を擁護するのが現象的対比である。

だが、これには多くの批判が向けられている。たとえば、松を見分けられるようになると松を見た際に「これは松だ」と判断できるようになるだろうが、知覚ではなくこうした判断が現象的差異の原因かもしれない。また、松を見分けられるようになると「松を見慣れた感じ」をもつだろうが、それが差異の原因かもしれない。あるいは、松を見分けられるときとそうでないときでは松への注意の向け方が異なり、それによって松の色や形を以前よりもきめ細かく捉えられるようになるだろうが、こうした注意や捉えられた性質のきめ細かさが現象的差異を生み出したのかもしれない。このように、現象的性格に基づく議論にはさまざまな反論が可能なのである。

こうした状況から二つの教訓が引き出せる。一つは、**現象的性格は高次性質が知覚されていると考える動機を与えるものではあるが、それに訴えて高次性質が知覚されているかどうかを決定することはできない**、というものである。したがって他の要因も検討する必要があるのだ。この点から、次章では知覚メカニズムを検討することになる。

もう一つは、**低次性質と高次性質とでは現象的性格に反映される仕方が異なる**というものだ。これは、高次性質の知覚可能性について論争があることから示唆される。低次性質が知覚経験の現象的性格に反映されていることを否定する人はいないが、高次性質が現象的性格に反映されているかどうかについては意見が分かれている。この点を考慮すると、仮に高次性質が知覚の現象的性格に反映されとしても、低次性質とは異なる仕方で反映されと考えられるのである。この点を踏まえて高次モード知覚説は、高次性質とは低次性質とでは知覚との関わり方が異なる（低次性質は知覚されるものであるが、高次性質は低次性質の知覚のされ方である）と主張する。

【第3章】

第3章では、他者の感情の知覚可能性に関する議論を検討する。本章でも、問題となった高次性質、つまり、他者の感情の知覚可能性を積極的に擁護するわけではない。前章と同じく、目的は、既存の議論の欠点を明示的にして、それを乗り越える方針をつかむことである。

本章ではとくに、Smith (2010)で展開された、フッサールの「付帯現前」に基づいた感情の知覚理論を検討する。付帯現前とは、物体を知覚したときに現在視界に入っていないという意味で見えていない物体の裏側も、物体全体の一部として視界に入っている表側に付帯的に意識に与えられ、その意味では見えているというものである。スミスによれば、「ある意味では知覚されていないが別の意味では知覚されている」という点は他者の感情にも言える。他者の感情は、それ関連する振る舞いによって確かめられ、その意味で知覚されているというのだ。

だが、この方針には問題がある。結局のところ、知覚されているのは感情そのものではなく感情に関連する振る舞いだけであり、感情はそこから推測されるものだとも考えられるのではないか。というのも、付帯現前というメカニズムを文字通りに他者について適用して言えるのは、現在視界に入っていない他者の背面も予期されているということだけだからである。そのため、振る舞いに関わる感情も付帯的に知覚されていると主張するためには、付帯現前というメカニズムを拡張する必要が出てくるが、こうした拡張によって付帯現前が推論的なものにすり替わっている可能性が出てくるのである。

拡張的なメカニズムを導入すると問題が生じることから次の戦略が示唆される。つまり、知覚メカニズムと認められているものを拡張せず、それが高次性質の知覚可能性を支えていると主張できればよいのだ。言い換えれば、**高次性質を捉える心的状態を支えるメカニズムが低次性質を捉えるためのメカニズムと同じであることを示す**のである。低次性質の経験は知覚だと問題なく認められるため、その経験を支えているメカニズムは知覚的なものとみなせるだろう。もし、高次性質の経験が低次性質の経験を支えるメカニズムと同じものによって可能になっているなら、そのメカニズムは知覚的なものであるため、高次性質の経験も知覚経験だとみなせるのだ。

とはいえ、拡張的な知覚メカニズムを導入せざるをえない場面が出てくるかもしれない。その場合にとりうる戦略は次のものである。すなわち、**高次性質の判断に低次性質についての信念・判断と共通する特徴（たとえば、意識的推論の不在、強制性、自己中心的な環境）があることを示しつつ、さらに、その判断の形成が知覚以外の心的状態では説明できない特徴をもつことを示す**のである。高次性質についての信念・判断の形成過程が、推論のような思考的なものでは説明できなければ、そうした信念・判断は高次性質の知覚に基づいていると考えられるのである。

【第4章】

前章までは高次性質の知覚可能性を擁護する既存の議論の欠点を探っていた。だが、第4章と続く第5章では、これまでの成果を踏まえて、既存の議論の欠点を補うように構築された高次モード知覚説を用い、特定の高次性質の知覚可能性を積極的に擁護する。本章では、前章で挙げた一つめの戦略を用いて不在の知覚可能性を擁護する。

「この前まであった建物がなくなっている」、「この皿は欠けている」、「今日は彼女がいない」、「まだパーティーが始まっていない」というように、われわれはしばしば何かの不在や欠如といった否定的事態に気づく。このように否定的事態に気づく経験を、不在の経験と呼ぶことにしよう。こうした不在の経験は、期待や想像といった、知覚以外の様々な認知能力を介して成立するものだと考えられるかもしれない。というのも、知覚は、机や椅子のような物体、物体の衝突や雷のような出来事など、主体の周りに〈存在している〉・〈起こっている〉肯定的なものしか捉えられないと思われるからである。これに対し、本章では、ある種の不在は知覚可能であると主張した。検討したのは、〈音がしていない〉と気づく場合、音の不在の知覚である。

音の不在の知覚可能性は、前章で明らかになった第一の戦略、「高次性質と低次性質が同じ知覚メカニズムによって知覚可能になっているということを示す」という方針から擁護できる。つまり、音という低次性質を知覚することと、音の不在という高次性質を知覚することのメカニズムは同じだと言えるのである。

音の不在は、音がして、一旦とまり、また音がするというまとまりのなかで知覚されるものである。そして、こうしたまとまり（音脈）が形成されることは、聴覚情景分析という心理学的メカニズム(Bregman 1990)で説明できる。音脈は、聴覚的性質（音色・音高・音量）が類似しているものを一連の流れとしてまとまることで形成される。それらがまとめられるのは、同じ音源によって生み出された音波は同じような性質をもっている確率が非常に高いため、このような仕方では音波をまとめることで、音源についての情報を効率よく得ることができるからである。そして、音の不在は、こうしてまとめられた音脈のなかで、〈物体の振動が一旦とまった〉ということに対応して知覚的意識に現れていると考えることができる。以上のように、**音の不在という高次性質が知覚可能であることは、音を聞き、音源の情報を得るための聴覚メカニズムに訴えて説明できるのだ。**

このように、複数の音をまとまるという知覚的メカニズムに訴え（高次モード知覚説の第一の戦略）、さらに、まとまったもののなかには低次性質ではないものがある（音の不在）という点から、音の不在という高次性質の知覚可能性が擁護されるのである。

【第5章】

第5章では、二つめの戦略で高次モード知覚説を支持する具体例として、美的性質の知覚を取り上げる。本章で一つめではなく二つめの戦略を用いたのは、美的性質を知覚するためには学習が必要だと考えられるからである。前章で検討した音の不在とは異なり、知覚メカニズムに訴えるだけでは説明されず、知覚メカニズムの拡張が必要とされると考えられるのである。

本章では、分析美学における美的性質の知覚の議論の嚆矢となった、フランク・シブリーの見解を取り上げた。シブリーの美的知覚説にとって重要なのは、「美的な一般原理が成り立たないこと（非条件支配的という特徴）」である。たとえば、繊細さをもつと言われる対象は、典型的には、線が細く、色が薄く、等々といった低次性質を備えているかもしれないが、そうした低次性質のいくつかを欠くものが繊細であったり、そうした低次性質をすべて備えているにもかかわらず繊細でない作品があったりする。そのため、「a、b、c... といった低次性質を備えている対象は X という美的性質をもつ」というような一般原理は成り立たない。そうだとすると、ある作品を鑑賞したときに下される「これは繊細である」といった美的判断は、低次性質の知覚と一般原理からの推論が組み合わさって形成されるとは言い難い。むしろ、繊細さといった美的性質の知覚に基づいて非推論的に形成されたと考えられるのである。

本章の議論では、上記のシブリーの理論に、第3章で挙げた第二の戦略を付け加える。美的経験には、意識的推論の不在、強制性、自己中心的な空間上への定位といった、高次性質の判断に低次性質についての信念・判断と共通する特徴があることがある。そのため、美的性質という高次性質は知覚可能だと考えられるのである。

だが、美的知覚には特有の問題がある。それは、美的判断の相対性である。二人の理想的鑑賞者が同じ対象を知覚しても異なる美的判断を下す可能性があると考えられるが、こうした美的判断の違いは主観的な意見の相違に基づくと考えられる。すると、美的判断の根拠となるような美的知覚などないのではないかと考えられるのである。それに対しては、理想的鑑賞者が異なる趣味をもつために、同じ対象を知覚してもそれがもつ低次性質が異なる美的性質へとまとめ、その違いが美的判断の不一致の原因になっていると説明できる。さらに、こうした知覚の違いは、ゲシュタルト的な知覚体制化（低次性質がどのようにして全体としてまとまるのか）の違いとして説明することができる。

このように、低次性質の高次モード的なまとまりに「美的なものに関する趣味から知覚への影響」のメカニズム考慮することで、「低次性質の美的なまとまり」として美的性質が知覚されると主張できるのである。

【第6章】

最終章である第6章の目的は、これまで提示してきた高次モード知覚説が第1章で挙げた課題（存在論的・認識論的帰結を引き出せる）を果たしているかを検討することである。

高次モード知覚説は、「知覚のモード」を導入したが、それによってこれらの帰結を引き出せるかどうか懸念が出てくる。まず存在論的帰結に関しては、モードによって現象的性格に反映される対象や性質そのものは環境に存在していないことが問題となる。モードは経験の特徴であり、外界に存在するものの特徴ではないのだ。すると、高次性質が知覚のモードとして意識に現れていても、それに対応するものは外界にないということになるだろう。

だが、モード知覚を引き起こす原因が環境にあると主張する余地がある。そして、そうした原因は、低次性質の集まりに還元されるものではない。というのも、その原因は、特定の知覚主体に高次のモードの知覚を引き起こすような低次性質の集まりであり、低次性質と知覚主体のあり方の両方に言及することによって特徴づけられるような傾向性だからである。このように考えると、高次モード知覚説からは、**高次のモードの知覚を引き起こす傾向性が環境にある**という存在論的帰結が導かれると言えるだろう。

認識論的帰結の懸念は次のようになる。上述の通り、高次モード知覚説によれば、モードと同一視される高次性質は対象がもつ性質ではないことになる。だが、高次性質は対象の性質であるかのように意識に現れている。この点で高次モード知覚は、高次性質についての信念や判断をすべて誤ったものにしてしまうという錯誤説を含意するようにみえる。そうであるなら高次モード知覚は、信念や判断の適切な根拠にはなりえないのではないか。

錯誤説が嫌われるのは、多くの誤った信念を主体に帰属させることで、主体を不合理な存在にしてしまうということである。だが、高次モード知覚説は主体を不合理にすることはない。対象は高次性質そのものをもってはいないが、高次モード知覚を引き起こす傾向性もっている。そのため、高次の知覚に基づく信念がすべて誤りだとしても、環境にまったく根拠をもたないような偶然的な誤りとは区別される。そして、両者を区別できるなら、高次モード知覚は判断の客観性の基準を与えるという点は維持できる。環境に根拠をもつ知覚に基づいた判断は適切なものであり、根拠をもたない知覚に基づいた判断は不適切なものだと言えるのである。そのため高次モード知覚説からは、**高次性質についての信念・判断の適切な根拠として、高次モード知覚がある**という認識論的帰結が導かれるのである。

以上のことから本稿は、高次モード知覚説は存在論的・認識論的帰結を含意する実質的な知覚理論であると結論する。

Thesis Abstract

No. 1

Registration Number:	<input type="checkbox"/> "KOU" <input type="checkbox"/> "OTSU" No. *Office use only	Name:	Tohru Genka
Title of Thesis: The Boundary between Perception and Judgment: How many kinds of things can we perceive?			
Summary of Thesis: This study aims to show that some kinds of properties that are seemingly unperceivable can, in fact, be perceived. The problem considered in this study is the so-called "admissible contents of perceptual experience." This dispute concerns the nature of perceptual experience. The question is, what kinds of objects and properties can be perceived? There are two classes of properties concerned with this dispute: low-level properties and high-level properties. Low-level properties are the sort of things that everyone will agree can be directly perceived. These include color, shape, location, motion, distance, sound, taste, smell, texture, temperature, and so on. On the other hand, high-level properties are those that everyone will agree we can understand, believe, or think about, but it is disputed whether they can be directly perceived. These include kind properties (e.g., being an apple, being a table), others' emotions (e.g., being sad), absence or negative states (e.g., there are no sounds), aesthetic properties (e.g., being graceful), moral properties (e.g., being cruel), dispositional properties (e.g., being edible), causal relations (one thing causes something else to happen), semantic properties (the meaning of a sentence or utterance), and so on. I survey previous studies on the perception of kind properties and others' emotions, in order to clarify the key points and strategies needed to defend the perceivability of seemingly unperceivable things. Then, I positively defend the perceptual validity of absence and aesthetic properties. In order to claim that some kinds of high-level properties are perceivable, I present "The High-Level Mode Perception Theory." This theory divides perceptual experience into two parts: representational content and Gestalt representational mode. Representational contents contain low-level properties, and these properties are reflected in the phenomenal character of perceptual experience by virtue of being represented by perceptual experience. On the other hand, high-level properties are not contained in their representational content. Rather, they are particular ways (or modes) in which low-level properties are represented. In other words, high-level properties are Gestalt-like configurations of low-level properties. Low- and high-level properties thus stand in a part-whole relation in the phenomenal character of perceptual experience.			